

平成二十六年年度「花のまわりみち」

俳句入選句

木村 里風子 選

特選

(三句)

「二席」

仰ぎみて花守の死を悼みけり

中植紀子

「二席」

花巡りしばらく歌人となりにけり

大林隆子

(評) 美しさに気持は歌人に、歌人に、という措辞が美しい桜のすべてを物語る。

「三席」

花^{はな}篝^{かがり}とどかぬ闇に守衛立ち

野津 訓子(訓子)

(評) 守衛の本分は、これを弁えて人目に触れないように。人の安全と花を見守ることにある。

入選

(三句)

満開の花に鶯ひよどり鳴く昼下り

亀井朝子

(評) 鶯は花の蜜を吸いに、鋭い鳴き声で縄張りを主張する。鳥にも美しさが分かるのであろう。

花びらで染まりてゐたる桜土手

五石満智子

(評) 桜土手に散った花びらの多さ、染まるが証明。単純平明の中に美しさが充ちている。

手をつなぐ園児二列に落花浴ぶ

小早川真(一真)

(評) 二列に行儀よく並んで花の下を行く園児の声が聞こえるのが言外のことば。

佳作

(十八句)

花守の逝きて植ゑたる桜かな
琴の音の花にまぎれて夕まぐれ
人に酔ひ桜に酔いて疲れをり
雨あがり触れて崩るる桜かな
枝移る鳥の弾んで夕桜
造幣といふ豊かさや花満つる
造幣の音のかすかに花の昼
風に乗り桜花道一人旅
琴の音に寂しきのせて花の散る
琴の音にまはり道して花の昼
語らずも添つて夫婦の花の道
花吹雪ひと片とらえくもの糸
花の名の由来豊かやまわり道
花は葉へひと筆書きの世界地図
振りむけば玻璃に映りし八重桜
造幣の音も静まり夕桜
花びらの舞ひ散る園や硬貨打つ
掌の上にそつと乗せたり花手毬

選者吟

花守は黄泉へ花笠咲きにけり

石橋康徳
山岡祥子(祥子)
陰山明枝
若宮直美
山岡祥子(祥子)
浅田洋子
志田寿江
桂健治
大古加代子
幡野月恵子
岡村明美
横山康登
渡辺義昭
渡部重利(稲穂)
松尾幸枝(千波矢)
船本世紀子
正山史明
児玉幸枝

木村里風子